自閉症スペクトラムと注意欠陥多動性障害の診断を受けている小学１年の児童への小学校に慣れるための支援

１．事例の概要

Ａ児は、Ｂ小学校の情緒障害特別支援学級に在籍する小学１年である。Ａ児は、保育園年長児の時に自閉症スペクトラムと注意欠陥多動性障害の診断を受けている。保育園の時から集団行動が苦手で、自分の気に入る活動以外はじっとしていることが困難な様子が見られた。また、小学校に入学してからは、全校児童が参加する集会等に出ることは不安と恐怖が大きく、その場所に行くことができなかった。

そこで、Ａ児に対して、臨床発達心理士等を交えてケース会議を定期的に行い、支援の方法等を検討した。そして、Ａ児が環境の変化に対応できることを目指し、教師や様々な人との人間関係を築くことや、学校が楽しい場所であることを伝えるようにしてきた。Ａ児は、入学当初こそ不安感や音、大勢の児童に対する恐怖感をもっていたが、徐々に小学校に慣れてきている。時々、Ａ児の恐怖感や不安感が見られることもあるが、担任との人間関係が築かれ、大きなパニックを起こしたり、感情の乱れが長引いたりすることもなくなってきている。

キーワード　自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害、聴覚過敏、就学、視覚的な提示、ケース会議

２．生徒の実態

Ａ児は、Ｂ小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する小学１年である。Ａ児は、保育園年長児の時に自閉症スペクトラムと注意欠陥多動性障害の診断を受けている。保育園の時から集団行動が苦手で、自分の気に入る活動以外はじっとしていることが困難な様子が見られた。また、小学校に入学してからは、全校児童が参加する集会等に出ることは不安と恐怖が大きく、その場所に行くことができなかった。

また、Ａ児は感覚が過敏であり、音に対する抵抗感も大きく、歌声や音楽の授業の時には耳をふさぐ様子も見られる。味覚も過敏で、給食では偏食傾向が見られる。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　Ｂ小学校のあるＣ町では、発達支援連携協議会を設置し、保育園発達支援部会、小学校教育支援部会等の部会を設けている。各会議では、保健センター、乳幼児学級、ことばの教室、保育園、小学校、中学校等様々な町内の機関が、母親の妊娠期から中学校卒業までを途切れなく支援するべく連携している。【基礎１】

○　Ｂ小学校では、支援が必要な児童が小学校入学前に１回、入学後は学期ごとにケース会議を開いている。参加者は、保護者や校長、特別支援教育コーディネーター、担任、教育委員会、保健師、臨床発達心理士等である。【基礎２】

○　年に２回開催されるＢ小学校区の保育園発達支援部会に、Ｂ小学校校長と特別支援教育コーディネーターが参加し、気になる保育園児の様子を参観し、個別の指導計画を作成している。また、その計画の実行・経過観察・評価、計画の見直しのサ

イクルで、保育から教育へ引き継ぐ仕組みを作っている。【基礎３】

○　Ｂ小学校では、特別支援学級の児童が交流学級で学習する時は、特別支援学級の担任がＡ児の側について個別的に支援を行っている。また、通常の学級に在籍する児童が、不安定さから特別支援教室を利用したいと考えた時には、フリーの教員が対応し、いつでも受け入れ可能な体制をとっている。【基礎６】

４．合意形成のプロセス

Ａ児の保護者は、小学校への就学を考えるに当たり、入学前年から、医療機関から伝えられたＡ児への支援や配慮について、Ｂ小学校及びＣ町教育委員会へ申し出た。Ｃ町教育委員会では、その申し出を受けて、Ａ児の入学後の支援を考えるために、Ａ児の保護者、保育園長、臨床発達心理士、ことばの教室担当者、Ｃ町教育委員会でケース会議を実施した。また、Ａ児の保護者は、Ｂ小学校の授業の様子を見学し、入学後は、Ｂ小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級への就学を希望し、自閉症・情緒障害特別支援学級への入級に合意した。

５．合理的配慮の実際

○　Ａ児は多くの情報を保持することが苦手である。そこで、学習に必要のない情報は可能な限り排除し、「今から大事なことを３つ話すよ。」と注意喚起してから指示や説明をするようにしている。また、聴覚だけでなく視覚に訴えるような指示・説明を工夫している。【合理①―１－１】

○　教室内にはＡ児の興味を引く図鑑や本を用意し、その本を共通の話題として、Ａ児とのコミュニケーションを図っている。また、Ａ児の特性に配慮して、具体物を用意し、興味を引きながら授業を行っている。例えば、算数では、数を視覚的に確認できるような教具を用意し、Ａ児に数量関係を理解させている。【合理①－２－１】

○　Ａ児が環境の変化に対応できることを目指し、教師や様々な人との人間関係を築くこと、学校が楽しい場所であることを伝えるようにＡ児に接している。【合理①－２－３】

○　Ａ児に対して、臨床発達心理士を交えてケース会議を定期的に行っている。また、専門的な医療機関からも定期的にアドバイスを受け、その内容はケース会議で保護者から伝えてもらっている。【合理②－１】

６．本事例の成果と課題

Ａ児は、入学当初こそ不安感や音、大勢の児童に対する恐怖感をもっていたが、徐々に小学校に慣れてきている。時々、Ａ児の恐怖感や不安感が見られることもあるが、担任との人間関係が築かれ、大きなパニックを起こしたり、感情の乱れが長引いたりすることもなくなった。しかし、集会活動等に参加することは、まだ難しい。また、予定の変更等への対応にも困難さが見られる。

今後は、Ａ児の保護者が望む、同学年児童と同じような集団生活ができることを目指していきたい。今後、皆と同じように行動できるように、ソーシャルスキルトレーニング等を取り入れたい。